

## M16c マウンダー極小期における太陽の磁場反転周期

宮原 ひろ子 (名大STE研)、増田 公明 (名大STE研)、村木 綾 (名大STE研)

マウンダー極小期 (1645-1715年) は、約70年間にわたって黒点がほとんど現れなかった時期として知られる。この時期において、太陽の磁場反転が存続していたかどうかは、これまで確定的な証拠が得られていなかった。

我々は、マウンダー極小期に形成された樹木年輪に含まれる放射性炭素の濃度を測定することによって、当時の銀河宇宙線の地球への到来量の変化を調べ、太陽磁場の変動を調べた。その結果、マウンダー極小期においても、太陽が周期性を持って磁場反転を存続していたという事が判明した。現在では約11年で変動している太陽の活動度は、マウンダー極小期においては約14年の周期性で変動し、また、磁場反転の周期は約28年であったということも判明した。これは、太陽の活動度と、周期長の逆比例の関係を支持する結果となっている。